

- 5 仮名づかいは、原則として歴史的仮名づかに統一し、適宜送り仮名を加えた。
- 6 反復記号は、漢字のばあいは「々」に統一し、仮名のばあいは「ゝ」に統一したが、その語が上の語と品詞を異にするばあいには、仮名に改めた。また「く」はこれを用いず、同じ語をくりかえした。
- 7 読みにくい、また誤読のおそれのある語には、なるべく振仮名を加えた。
- 8 本文中の固有名詞および出典等については、できるだけこれを注記したが、語釈については、簡略を旨とした。これらはすべて、○印の下に記した。また本文の異同については、△印の下にこれを掲げて、前者と区別した。

一、本書の校訂にあたって、阪本千秋氏の助力をえたところが少なくない。記して深謝の意を表したい。

一九七二年一月 校訂者 識

一九八一年十月 校訂者 識

目次

烏丸光広本影印  
凡例

徒然草 上

序	つれづれなるまゝに……………	一	ひとり灯のもとに……………	一一
一	いでやこの世にうまれては……………	一	和歌こそ……………	一一
二	いにしへのひじりの御代の……………	三	いづくにもあれしほし旅だちたるこそ……………	二二
三	よろづにいみじくとも……………	三	神楽こそ……………	三三
四	後の世の事心にわすれず……………	四	山寺にかきこもりて……………	三三
五	不幸に愁にしづめる人の……………	四	人はおのれをつまやかにし……………	三三
六	わが身のやんごとなからんにも……………	五	折ふしのうつりかはるこそ……………	三四
七	あだし野の露きゆる時なく……………	五	一六 神楽こそ……………	三三
八	世の人の心まとはす事……………	六	一七 山寺にかきこもりて……………	三三
九	女は髪のためだからんこそ……………	七	一八 人はおのれをつまやかにし……………	三三
一〇	家居のつきづきしくあらまほしきこそ……………	八	一九 折ふしのうつりかはるこそ……………	三四
一一	神無月の頃……………	九	二〇 なにがしとかやいひし世すて人の……………	三七
一二	おなじ心ならん人と……………	一〇	二一 よろづのことは月見るにこそ……………	三七
			二二 なにごともふるき世のみぞ……………	三八
			二三 おとろへたる末の世とはいへど……………	一九
			二四 斎宮の野宮に……………	二〇
			二五 飛鳥川の淵瀬……………	二〇
			二六 風も吹きあへず……………	二三
			二七 御国ゆづりの節会……………	二三
			二八 諒闇の年ばかり……………	二三
			二九 しづかに思へば……………	三三
			三〇 人のなきあとばかり……………	三四
			三一 雪のおもしろうふりたりし朝……………	三五
			三二 九月廿日の比……………	三六

三三	今の内裏作り出されて……………	三六
三四	甲香は……………	二七
三五	手のわるき人の……………	二七
三六	久しくおとづれぬ比……………	二七
三七	朝夕へだてなくなれたる人の……………	二八
三八	名利につかはれて……………	二八
三九	或人法然上人に……………	三〇
四〇	因幡国に……………	三〇
四一	五月五日賀茂のくらべ馬を……………	三二
四二	唐橋中将といふ人の子に……………	三三
四三	春の暮つかた……………	三三
四四	あやしの竹のあみ戸のうちより……………	三三
四五	公世の二位のせうとに……………	三四
四六	柳原の辺に……………	三五
四七	或人清水へまゐりけるに……………	三五
四八	光親卿院の最勝講奉行して……………	三六
四九	老来りて……………	三六
五〇	応長の比伊勢国より……………	三七
五一	亀山殿の御池に……………	三八
五二	仁和寺にある法師……………	三九
五三	これも仁和寺の法師……………	三九
五四	御室にいみじき児の……………	四一
五五	家の作りやうは……………	四二
五六	久しくへだゝりてあひたる人の……………	四三
五七	人のかたりにいでたる歌物語の……………	四三
五八	道心あらば……………	四四
五九	大事を思ひたゝん人は……………	四五
六〇	真乗院に盛親僧都とて……………	四六
六一	御産の時……………	四八
六二	延政門院……………	四九
六三	後七日の阿闍梨……………	四九
六四	車の五緒は……………	四九
六五	この比の冠は……………	四九
六六	岡本関白殿……………	五〇
六七	賀茂の岩本橋本は……………	五一
六八	筑紫にながしの押領使など……………	五二
六九	書写の上人は……………	五三
七〇	元応の清暑堂の御遊に……………	五三
七一	名を聞くより……………	五四
七二	賤しげなるもの……………	五四

七三	世にかたりつたふる事……………	五五
七四	蟻のごとくにあつまりて……………	五六
七五	つれづれわぶる人は……………	五七
七六	世の覚えはなやかなるあたりに……………	五八
七七	世の中にその比人の……………	五八
七八	いまやうの事どもの……………	五九
七九	何事も入りたゝぬさましたる……………	五九
八〇	人ごとに我が身にうとき事を……………	六〇
八一	屏風障子などの……………	六一
八二	うすものの表紙は……………	六一
八三	竹林院入道左大臣殿……………	六二
八四	法頭三蔵の……………	六三
八五	人のこゝろすなほならねば……………	六三
八六	惟継中納言は……………	六四
八七	下部に酒のまする事は……………	六四
八八	或者小野道風の書ける……………	六六
八九	奥山に猫またといふものありて……………	六六
九〇	大納言法印の……………	六七
九一	赤舌日といふ事……………	六八
九二	或人弓いる事をならふに……………	六九
九三	牛を売る者あり……………	七〇
九四	常盤井相国……………	七一
九五	箱のくりかたに……………	七一
九六	めなもみといふ草……………	七二
九七	其の物につきて……………	七二
九八	たふときひじりの云ひ置きける事……………	七二
九九	堀川相国は……………	七三
一〇〇	久我相国は……………	七四
一〇一	或人任大臣の節会の……………	七四
一〇二	尹大納言光忠入道……………	七四
一〇三	大覚寺殿にて……………	七五
一〇四	荒れたるやどの人めなきに……………	七五
一〇五	北の屋かげに……………	七七
一〇六	高野証空上人……………	七七
一〇七	女のものいひかけたる返事……………	七八
一〇八	寸陰をしむ人なし……………	八〇
一〇九	高名の木のほり……………	八一
一一〇	双六の上手といひし人に……………	八二
一一一	囲碁双六好みて……………	八三
一一二	明日は遠国へ……………	八三

一三三	四十にもあまりぬる人の	八四
一三四	今出川のおほい殿	八四
一三五	宿河原といふ所にて	八五
一三六	寺院の号	八六
一三七	友とするにわろき者	八七
一三八	鯉のあつもの食ひたる日は	八七
一九九	鎌倉の海にかつをと云ふ魚は	八八
一二〇	唐の物は	八九
一二一	養ひかふ物には	八九
一二二	人の才能は	九〇
一二三	無益のことをなして	九一
一二四	是法師は	九二
一二五	人におくれて	九二
一二六	ばくちの負けきはまりて	九三
一二七	あらためて益なき事は	九三
一二八	雅房大納言は	九三
一二九	顔回は	九四
一三〇	ものにあらず	九五
一三一	まづしき者は	九七
一三二	鳥羽の作道は	九七
一三三	夜のおとどは	九七
一三四	高倉院の法華堂の三昧僧	九八
一三五	資季大納言入道とかや	一〇〇
一三六	くすしあつしげ	一〇一
	徒然草 下	
一三七	花はさかりに	一〇二
一三八	祭過ぎぬれば	一〇六
一三九	家に有りたき木は	一〇七
一四〇	身死して財残る事は	一〇九
一四一	悲田院の堯蓮上人は	一〇九
一四二	心なしと見ゆる者も	一一一
一四三	人の終焉のありさまの	一一二
一四四	梅尾の上人	一一三
一四五	御隨身秦重躬	一一三
一四六	明雲座主	一一四
一四七	灸治あまた所になりぬれば	一一四
一四八	四十以後の人	一一四
一四九	鹿茸を鼻にあてて	一一五

一五〇	能をつかんとする人	一一五
一五一	或人の云はく	一一六
一五二	西大寺静然上人	一一六
一五三	為兼大納言入道	一一七
一五四	この人東寺の門に	一一七
一五五	世にしたがはん人は	一一八
一五六	大臣の大饗は	一一九
一五七	筆をとれば	一二〇
一五八	盃のそこをすつる事は	一二〇
一五九	みなむすびといふは	一二一
一六〇	門に額かくるを	一二二
一六一	花のさかりは	一二三
一六二	遍照寺の承仕法師	一二三
一六三	太衝の太の字	一二三
一六四	世の人あひあふ時	一二三
一六五	あづまの人の	一二三
一六六	人間のいとなみあへるわざを	一二三
一六七	一道に携る人	一二四
一六八	年老いたる人の	一二五
一六九	何事の式といふ事は	一二六
一七〇	さしたる事なくて	一二六
一七一	貝をおほふ人の	一二七
一七二	わかき時は	一二八
一七三	小野小町が事	一二九
一七四	小鷹によき犬	一二九
一七五	世には心えぬ事の	一三〇
一七六	黒戸は	一三四
一七七	鎌倉中書王にて	一三四
一七八	或所のさぶらひども	一三五
一七九	入宋の沙門道眼上人	一三五
一八〇	さぎちやうは	一三六
一八一	ふれふれこゆき	一三六
一八二	四条大納言隆親卿	一三六
一八三	人つく牛をば	一三七
一八四	相模守時頼の母は	一三七
一八五	城陸奥守泰盛は	一三八
一八六	吉田と申す馬乗の	一三九
一八七	よろづの道の人	一三九
一八八	或者子を法師になして	一四〇
一八九	今日はその事を	一四三

一九〇	妻といふものこそ	一四四	二二〇	喚子鳥は	一五四
一九一	夜に入りて物のはえなしといふ人	一四五	二二一	よろづの事はたのむべからず	一五四
一九二	神仏にも	一四六	二二二	秋の月は	一五六
一九三	くらぎ人の	一四六	二二三	御前の火炉に	一五六
一九四	達人の人を見る眼は	一四六	二二四	想夫恋といふ樂は	一五六
一九五	或人久我繩手を通りけるに	一四八	二二五	平宣時朝臣	一五七
一九六	東大寺の神輿	一四八	二二六	最明寺入道	一五八
一九七	諸寺の僧のみにあらず	一四九	二二七	或大福長者の云はく	一五八
一九八	揚名介にかぎらず	一四九	二二八	狐は人にくひつくものなり	一六〇
一九九	横川行宣法印が	一四九	二二九	四条黄門	一六一
二〇〇	呉竹は葉はそく	一五〇	二二〇	何事も辺土は賤しく	一六二
二〇一	退凡下乗の卒都婆	一五〇	二二一	建治弘安の比は	一六三
二〇二	十月を神無月と云ひて	一五〇	二二二	竹谷乘願房	一六四
二〇三	勅勘の所に	一五一	二二三	たづのおほいどのは	一六四
二〇四	犯人をしもとにてうつつ時は	一五一	二二四	陰陽師有宗入道	一六五
二〇五	比叡山に大師勸請の	一五一	二二五	多久資が申しけるは	一六五
二〇六	徳大寺右大臣殿	一五二	二二六	後鳥羽院の御時	一六六
二〇七	亀山殿たてられんとて	一五二	二二七	六時礼讀は	一六六
二〇八	経文などの紐をゆふに	一五三	二二八	千本の釈迦念仏は	一六七
二〇九	人の田を論ずるもの	一五四	二二九	よき細工は	一六七

二三〇	五条内裏には	一六七
二三一	そのの別当入道は	一六八
二三二	すべて人は	一六九
二三三	万のとがあらじと思はば	一七〇
二三四	人のものを問ひたるに	一七〇
二三五	ぬし有る家には	一七一
二三六	丹波に出雲と云ふ所	一七二
二三七	柳筥にすゆるものは	一七三
二三八	御隨身近友が自讃とて	一七三
二三九	八月十五日九月十三日は	一七八
二四〇	しのぶの浦の蟹の見るめも	一七八
二四一	望月のまどかなる事は	一七九
二四二	とこしなへに連順につかはるゝ事は	一八一
二四三	八になりし年	一八一
奥書		一八三
兼好略年譜		一八四
皇室系図		一八五
堀川家系図		一八五

御子左家系図	一八五
京都付近地図	一八六
平安京条坊図	一八七
平安京大内裏図	一八八
平安京内裏図	一八九

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

徒然草 上巻

序 つれづれなるまゝに、日くらしすぐりにむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

一、い、で、や、この世にうまれては、ねがはしかるべき事こそおほかめれ。みかどの御位おほくらみはいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり。たゞ人も舎人とねりなどたまはるきは、ゆゝしと見ゆ。その子、むまごまでは、はふれにたれどなほなまめかし。それよりしもつかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したりがほなるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

○つれづれ―「さびしきころも有、しづかなるころもあり、ことたらぬ心もあり、されどみなおなじ心也。ここにいていへばさびしきといひ、所にていへばしづかなるといひ、事にていへばことたらぬといふべし。こゝにはしづかなるころを用ひられたり」(徒然草警斎抄)。「つれづれとは、すべきわざのなくて、ひまにてさびしきをいひ、さうざうしとは、あるべき物、あるべき事のなくて、たらぬがさびしきをいへり」(源氏物語玉の小櫛)。

○一の人―「執柄必蒙二座之宣旨」。  
 故称三人二(職原抄)。撰政関白の別称。  
 ○舎人など―天皇から近衛府の舎人などを隨身として賜わる身分。